

創立百周年記念論文集 下巻

九州大学文学部紀要・叢書・図書委員会

<https://hdl.handle.net/2324/7358024>

出版情報：2025-03-31. School of Letters, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

チーム推論の理論

— 社会存在論の観点から⁽¹⁾ —

倉 田 剛

1. イントロダクション

「チーム推論 (team reasoning) の理論」とは、標準的ゲーム理論における協調 (coordination) / 協力 (cooperation) のパズルを解決するために、経済学者・ゲーム理論家であるロバート・サグデンおよびマイケル・バカラックによって、合理的選択理論の内部で提案された理論を指す⁽²⁾。その理論は、「私」(個人行為者)に加えて「私たち」(あるいは「チーム」)という概念を理論的枠組みに取り込むという点において、社会存在論——とくにその一部としての集合的志向性の理論——と基本的アイディアを共有する。なぜなら、社会存在論者たちの多くは、「私-志向性」(I-intentionality)とは区別される「私たち-志向性」(we-intentionality) (たとえば「私-意図」に対する「私たち-意図」) の概念や、そうした集合的な志向的態度の担い手としての「複数の主体」(plural subject) といった概念を導入することによって、集合的行為、とりわけ協力活動を説明しようとするからである (Gilbert 1989; Searle 1990; Tuomela 2013)。

本稿の目的は、チーム推論の理論が社会存在論にもたらす寄与およびその方法論的含意を適切に評価することである。私たちは、まずこの理論の意義を明らかにするために、第2節において、従来の合理的選択理論の典型的な困難に言及し、第3節においてその困難を解決しようとするチーム推論の理論の基本的アイディアを抽出する。続く第4節では、その理論の主要な道具立てを考察し、第5節において、より一般的な観点、すなわち「実践的推論」という観点から理論を捉え直す。さらに第6節では、それまでの議論を踏まえて、チーム

推論の理論が、集合的意図の形成に関する説得的な説明を与えることを通じて、社会存在論に寄与しうることを論じる。最後の第7節では、チーム推論の理論が、社会存在論と手を携えて、「方法論的個人主義」の再考を促すことを示す。

2. 標準的な合理的選択理論の問題点

標準的な合理的選択理論の「問題点」はどこにあるのか。これに関して膨大な数の研究が積み重ねられてきたことは周知の事実である。以下ではチーム推論の理論—— および社会存在論—— の観点から見た典型的な問題点に話をかぎって議論を行うことにする。

シカ狩りゲーム

ゲーム理論家たちが好んで分析するモデルの中に「シカ狩りゲーム」(Stag Hunt Game) と呼ばれるものがある。これは次のような状況を抽象化したものだ。いま二人の人間が狩りに出かけている。最高の獲物であるシカは二人で一緒に狩らなければ得ることができない。すなわち、一人がシカを狩り、もう一人もシカを狩るときのみ得ることができる。しかし、彼らには、それよりも劣る獲物であるウサギを狩るという選択肢もある。この場合、二人が一緒になって狩る必要はない。ウサギは一人で狩っても確実に得られるからである⁽³⁾。

シカ狩りゲームにはいくつかのバージョンが知られているが、ここでは以下の利得表によって表現されるモデル（オーマン版）を検討することにした。

■シカ狩りゲーム（オーマン版）

		プレイヤー2	
		シカ	ウサギ
プレイヤー1	シカ	9,9	0,8
	ウサギ	8,0	7,7

なぜシカ狩りゲームは理論家たちによって繰り返し論じられてきたのだろうか。

その理由の一つは、二人でシカを狩れば各自の利得は最大になる（それぞれが利得9を得る）にもかかわらず、(シカ, シカ)という戦略のプロファイルがこのゲームの唯一の解とはならないからである。このゲームの（純粹戦略における）もう一つの解は（ウサギ, ウサギ）である。言い換えると、これら二つの戦略のプロファイルがナッシュ均衡になっている。

だが、なぜ各プレイヤーがともにウサギを選択することもゲームの解となるのか。一見するとこれは奇妙である。というのも、二人で一緒にシカを狩れば各自がより大きい利得9を得られるにもかかわらず、わざわざウサギを狩ってより小さい利得（7または8）を得ようとするのは合理的でないように見えるからだ。しかし、このゲームのポイントは、一方のプレイヤーがシカを狩り、他方がウサギを狩るときに、前者の利得が極端に小さくなってしまうことにある（この利得表では0）。したがって、相手もシカを狩るという確信がよほどないかぎり、シカを狩ることは大きなリスクを負うことになるのだ。これに対し、とりあえずウサギを狩っておけば、相手が何を狩ろうが最低でも利得7を得ることができる。相手も同じことを考えていると予想すると、結局のところ、双方ともより安全なウサギを狩ることに落ち着いても不思議ではない。これが（ウサギ, ウサギ）も解の一つであることの直観的な説明である。

もう少し詳しく解説しよう。（シカ, シカ）は（ウサギ, ウサギ）を利得支配しているにもかかわらず⁽⁴⁾、そのことは各プレイヤーが「シカ」を選択する理由にはならない。なぜなら「シカ」は無条件に（unconditionally）最適な戦略であるわけではないからだ。「ウサギ」を選ぶ者に対する最適応答は「ウサギ」であり、「シカ」ではない。言い換えれば、各プレイヤーにとって、「シカ」を選択するのが合理的であるのは、相手のプレイヤーが「シカ」を選ぶことを期待する（予想する expect）、あるいは信じる（believe）理由があるときかつそのときにかぎる。したがって問われるべきは、各プレイヤーは相手のプレイヤーが「シカ」を選ぶことを期待する（信じる）理由（reason）をもつか否かという問いなのである（Coleman & Gold 2018）。

均衡選択の問題に取り組むゲーム理論家たちは、「利得支配」の基準は自然で

あると述べるが、サグデンによれば、それは「シカ」を選ぶのが合理的だという直観を述べ直したものにすぎない。実際のところ、標準的な合理的選択理論の内部でこの直観を説明することは難しい⁽⁵⁾。これに対し、サグデンは「その直観は正当化を要する」と主張する（Sugden 2000: 181）。ここに本稿の主題である「チーム推論」に至る重要な動機を見いだすことができる。

ハイローゲーム

チーム推論の理論を動機づけている、従来の合理的選択理論の問題点をより明確にするために、もう一つだけ例を挙げておこう。それは「ハイローゲーム」(Hi-Lo Game) と呼ばれるゲーム形式である。

■ハイローゲーム

		プレイヤー2	
		Hi	Lo
プレイヤー1	Hi	2, 2	0, 0
	Lo	0, 0	1, 1

このゲームはきわめて単純な構造をもつ。二人のプレイヤーがともに「Hi」を選択すれば、それぞれの利得は2であり、ともに「Lo」を選択すればそれぞれの利得は1である。（「Hi」と「Lo」そのものにとくに意味はないので、それぞれにどのような「戦略」を当てはめてもよい。）一方が「Hi」を選択し、他方が「Lo」を選択するケースにおいて、それぞれの利得は0になる。つまり二人が互いに異なる戦略を採用した場合は何も得られない⁽⁶⁾。

ゲームの解は（Hi, Hi）と（Lo, Lo）の二つである。ここでシカ狩りゲームと同様の問いが生じる。各自の利得は、（Hi, Hi）が実現するケースの方が、（Lo, Lo）が実現するケースよりも明らかに大きいにもかかわらず、なぜ合理的選択理論は（Hi, Hi）を唯一の解にできないのか。さらに言えば、ハイローゲームの利得支配は、シカ狩りゲームのそれと比べてより「純粹」である。なぜなら、たしかにシカ狩りゲームにおいて、（シカ, シカ）は（ウサギ, ウサギ）を利得

支配しているが、(ウサギ, ウサギ) はリスク支配的な (risk dominant) 動機⁽⁷⁾、すなわち、リスクを避けようという動機によって実現しうる均衡であり、各自が「ウサギ」を選択することはある意味で「合理的」だと言えるからである。(相手がリスクを避けようと「弱気」になって「ウサギ」を選択するかもしれないと疑い始めると、自分も「ウサギ」を選択した方がよいと考えるようになるし、相手も自分と同じように思考するだろう。) ところがハイローゲームでは、(Lo, Lo) はたんに利得支配されているだけであるから、この均衡が実現する「合理的な理由」はどこにもないように見える。つまり、このゲームではリスク支配が事態を複雑にすることはないので、両プレイヤーが「Hi」を選ぶことは(シカ狩りゲームの「シカ」と比べて) より「自明」に見えるのだ。それだけに合理的選択理論が (Hi, Hi) を唯一の解にできないことがいっそう深刻に映るのである。

3. 「チーム推論」の基本的なアイディア

標準的な合理的選択理論には「何かが欠けている」(something is missing) (Sugden 2000)。サグデンならずとも、私たちの多くはそう考えるはずである。しかし、欠けているものとは正確には何であるのか、そしてその欠如をいかに補えばよいのかという問いに答えることは容易ではない。サグデンは、ある理論を構築することによって、これらの難問に首尾一貫した答えを与えようとするのだが、この第3節では、その理論の詳細(第4節)を検討する前に、それを支える基本的アイディアを確認することにしたい。

問題意識と問い

サグデンにとって、前節で考察したような合理的選択理論の困難は何に起因しているのか。サグデンの答えは次の言葉の中に見出すことができる。

ほぼすべての意思決定理論は、行為者性 (agency) が個人に帰属すること

を前提している。各個人は、自分自身の選好や信念にもとづいて意思決定を行うものとして理解される。

ある人は、自分の行動が他の人に及ぼす結果についての選好をもっているかもしれないが、それでもそれはその人の選好である。その人は、他人が何を選択するかについての信念をもっているかもしれないが、それはやはりその人の信念である。意思決定を行うとき、その人は独りぼっちで行為するのだ (she acts alone) (Sugden 2005: 181)。

サグデンは、これまでの意思決定理論（合理的選択理論）は、自らの選好と信念のみによって行為選択を行う個人しか前提してこなかったと主張する。これが「行為者が個人に帰属する」ということの意味である。先に指摘した困難はこの前提に由来する。「その人の選好」(her preferences) や「その人の信念」(her beliefs) といった表現がわざわざ強調されているのは、それ以外の選好や信念（心的態度）、すなわち個人のものではない選好や信念がありうるとサグデンは考えているからである。それでは、それらはどのような心的態度であるのか。

「選好」という心的態度に焦点を当てよう⁽⁸⁾。「チーム選好」(“Team Preferences”) と題されたサグデンの論文はごくありふれた場面の考察からはじまる (Sugden 2000)。それは夏休みの過ごし方について家族で話し合うという場面である。サグデンによれば、この種の話し合いにおいては、私たちの選好 (our preferences) に関するいくつかの共通理解があるという。「私たちの選好」とは、「私たちはホテルをキャンプ場よりも好むが、自炊できる宿泊施設をホテルよりも好む」や、「私たちは都市観光やショッピングよりも自然の中でゆっくり過ごすことを好む」といった文で表現される選好を指す。だが、「私たちは x を y よりも好む」とは正確に何を意味しているのか。それは私たちのそれぞれ (each of us) — 私の妻、私の息子、私の娘、私 — が x を y よりも好むということの意味するのだろうか。サグデンはこの問いに対し、「私たちの選好」は「私たち各自の選好」とまったく同じというわけではない、と答える。私の好み

(選好)は私の息子や娘の好みとは異なるかもしれないし、私の妻の好みとも異なるかもしれない。それにもかかわらず、「私たちが(様々な理由から)自炊できる宿泊施設をホテルよりも好む」ことは十分にありうる⁽⁹⁾。「私たちはxをyよりも好む」は「私たちのそれぞれはxをyよりも好む」と同値ではない(‘We prefer x to y’ is not equivalent to ‘Each of us prefers x to y’) (Sugden 2000: 176) というサグデンの主張は直観的には違和感なく受けいれることができる。

このようなサグデンの主張は、社会存在論者たち、とりわけ集合的志向性 (collective intentionality) の理論家たちの主張を想起させる。なぜなら彼ら(の多く)は、集合的な心的態度は個人の心的態度の $\dot{\text{たん}}\dot{\text{な}}\dot{\text{る}}\dot{\text{総和}}\dot{\text{で}}\dot{\text{な}}\dot{\text{い}}$ と説くからである。このことは、集合的態度がつねに $\dot{\text{分}}\dot{\text{配}}\dot{\text{的}}$ (distributive) $\dot{\text{で}}\dot{\text{あ}}\dot{\text{る}}$ とは $\dot{\text{か}}\dot{\text{ぎ}}\dot{\text{ら}}\dot{\text{な}}\dot{\text{い}}$ ことも意味する。たとえば「私たちが」三人のメンバーから成り、かつ「私たちはpを受け容れる」(集合的受容)が成り立っているとしても、そこから「メンバー1はpを受け容れる」かつ「メンバー2はpを受け容れる」かつ「メンバー3はpを受け容れる」を導出できるとは $\dot{\text{か}}\dot{\text{ぎ}}\dot{\text{ら}}\dot{\text{な}}\dot{\text{い}}$ (ここで“p”はある命題を指す)。チーム推論と集合的志向性との関係は第6節で考察することにし、従来の合理的選択理論の問いとサグデンの問いを次のように対比しておこう (Nalli 2021: 22; Coleman & Gold 2018: 1774)。

■標準的な合理的選択理論 (ゲーム理論) の問い

$\dot{\text{私}}$ は何を欲するのか。(What do *I* want?)

$\dot{\text{私}}$ はそれを得るために何をすべきか。(What should *I* do to achieve this?)

■サグデン (チーム推論) の問い

$\dot{\text{私}}\dot{\text{た}}\dot{\text{ち}}$ は何を欲するのか。(What do *we* want?)

$\dot{\text{私}}\dot{\text{た}}\dot{\text{ち}}$ はそれを得るために何をすべきか。(What should *we* do to achieve this?)

$\dot{\text{私}}$ はそれを得るために、 $\dot{\text{チ}}\dot{\text{ーム}}\dot{\text{の}}\dot{\text{メ}}\dot{\text{ン}}\dot{\text{バ}}\dot{\text{ー}}$ として、いかなる役割を果たすべきか。(What should *I* do as a team member to play my part in achieving this?)

基本的アイデア

サグデンの基本的アイデアは、複数の個人からなるチーム（集団）は行為者（agent）であり、そうしたチームのメンバーたちによる特別な様態の推論、すなわちチーム推論（team reasoning）が存在するというものである。チーム推論を行っているプレイヤーたちは、まず、プレイヤーたちの集団にとって最善の結果をもたらす結果を探し出す。次いで、もしそうした結果が一意的に存在するのであれば、彼らは最適な戦略の組の構成要素である戦略を識別し、それを選択する。チーム推論の理論の目的は、この基本的アイデアに具体的な枠組みを与えることである。

4. チーム推論の理論

ここからはサグデンが提案する理論を概観する。時折登場するテクニカルな概念については、そこで意図されている内容の方に着目してほしい。

サッカー選手問題とチーム推論

「サッカー選手問題」(The Footballers' Problem) と呼ばれる具体的なゲーム——ハイローゲームとまったく同じ形式をもつ——の話からはじめよう。その利得表は以下のように示される。

■サッカー選手問題

		プレイヤー B	
		左	右
プレイヤー A	左	10, 10	0, 0
	右	0, 0	11, 11

このゲームがモデル化しているような状況とは次のようなものである。プレイヤー A はゴール前にいるプレイヤー B にパスを出そうとしている。A が左にパスを出して、B が左に動けば、得点できるチャンスが上がるので、各プレイヤー

は10ずつ利得を得る。また、Aが右にパスを出して、Bが右に動けば、得点できるチャンスはさらに上がるので、各プレイヤーは11ずつ利得を得る。しかし、Aが左にパスを出し、Bが右に動いてしまえば、得点できるチャンスはなくなるので各プレイヤーの利得は0であり、同様にAが右にパスを出し、Bが左に動くとも各プレイヤーの利得は0になる。

このゲームは純粋戦略において2つのナッシュ均衡をもつ。(i) AとBがともに「左」を選ぶ。(ii) AとBがともに「右」を選ぶ。つまり(左, 左)と(右, 右)がゲームの解である⁽¹⁰⁾。

問題は、繰り返し述べてきたように、なぜ従来のゲーム理論では(右, 右)を唯一の解として導けないのかという点にある。ゲーム理論家たちにとって、これはより一般的な問題、すなわち均衡選択問題の一つの実例であり、彼らの多くは「利得支配」の基準を提案することで問題を解決しようとしたが、それは、サグデンによれば、各サッカー選手にとって「右」を選択することが合理的であるという直観を一般的な用語で述べ直したものにすぎない。これに対し、サグデンは「チーム推論の理論」によってその直観の正当化を目指すのである。

チーム指向推論

チーム推論の理論に構築に向けて、まずは「チーム指向推論」(team-directed reasoning)と呼ばれる推論の構造が分析される。このチーム指向推論は、人びとが自分自身をチームのメンバーとして行為していると理解しているときの推論をモデル化したものである。この推論の際立った特徴は、「それが、他の諸個人の選択に関する行為者の信念に条件づけられない、行為のための助言を生み出す」点にあると言われる(Sugden 2000: 191)。だが、ここで二つの疑問が生じる。第一に、「他者の選択に関する行為者の信念に条件づけられない」とはそもそもどのようなことであるのか。第二に、なぜそうした特徴が重要なのか。

第一の疑問について答えておこう。単純な例に即して言えば、サッカーの試合において監督はサッカー選手AとBをばらばらの個人ではなく、一つのチームのメンバーと見なして助言を与えるだろう。その助言の「論理」とは、チー

ムの目的はチームの利得を最大化することなのだから、行為の最善の組み合わせはAとBがともに「右」を選ぶことである。ゆえに (therefore)、AとBは「右」を選択するべきだ、と結論する。この「ゆえに」は、チームのメンバーであるとはいかなることなのかを理解している人にとっては自明（説明不要 self-explanatory）である (ibid., 183)。この論理においては、AもBも自らの選択を相手の選択に関する信念に条件づけていない。つまり、各自が相手の選択を予想して、それに対する最適応答をする（相手が「右」を選択するならば、自分も「右」を選択する方が得である。同様に、相手が「左」を選択するという条件下で、自分も「左」を選択するのが最善である、等々）といった推論は行われていない。もちろんチーム指向推論をする二人のサッカー選手は、基本的には、それぞれ「監督の助言」なしにそれを行う。

第二の疑問についてはどうだろう。「シカ狩りゲーム」にせよ、「ハイローゲーム」にせよ、「サッカー選手問題」にせよ、相手がこれを選択するならば、私はこれを選択するのが最善であるという推論を行う。しかし相手も同じように推論している（と仮定される）。私は相手もそうした推論を行っているという信念のもとで推論するが、相手も私がそうした推論を行っているという信念のもとで推論する。これが理論上は延々と繰り返される。こうして問題とされる「条件づけ」は、通常の戦略的推論において無限後退を生じさせてしまう。しかし条件づけを排除することによって、そうした無限後退を回避することができる。

チーム指向効用関数

やや形式的になるが、「チーム指向効用関数」(team-directed utility function) という概念の定義を見ておこう。これは「チーム選好」(より正確には「チーム指向選好」)を理解するうえで重要となる。

[・・] チーム指向効用関数 $t(\cdot)$ は、各結果 x に対して、「チーム指向効用」と呼ばれる単一の効用指標 $t(x)$ を割り当てる関数として定義される。これは該当する結果に対するチーム指向選好の表現として解釈されなければ

ばならない (Sugden 2000: 192)。

サッカー選手問題を例にとると、この関数は (左, 左) という結果の入力に対し、10 というチーム指向効用を出力する。同様に、(右, 右) を入力するとチーム指向効用 11 を返す。なお、(左, 右) と (右, 左) という結果の入力に対する関数の値 (チーム指向効用) は 0 である。サグデンは、プレイヤーの集合、戦略の集合、およびこのチーム指向効用関数からなるゲームを「チーム指向意思決定問題」(team-directed decision problem) と呼ぶ。サッカー選手問題をチーム指向意思決定問題として捉えると、次の特異な利得表として表現することができる。

■ チーム指向意思決定問題としてのサッカー選手問題

		プレイヤー B	
		左	右
プレイヤー A	左	10	0
	右	0	11

いま述べたことをもう少し正確に述べ直すと次のようになる。G をゲーム、 $t(\cdot)$ をチーム指向効用関数とし、任意の s_j^* はプレイヤー J の戦略集合 S_j の要素であるような戦略のプロファイル $(s_1^*, \dots, s_n^*)$ があり、このプロファイルから、チーム指向効用関数 $t(\cdot)$ によって得られるチーム指向効用が、他のいかなる戦略のプロファイルから得られる効用よりも大きいと仮定する。このとき、各プレイヤー A_i が、 $(s_1^*, \dots, s_n^*)$ はチーム指向効用を一意的に最大化するという事実によって戦略 s_j^* を選択するならば、そのプレイヤーは戦略ゲーム G に関してチーム指向推論を行っている (cf., Sugden 2000: 193)。

ややテクニカルな表現であるが、言わんとすることはごく単純である。ゲーム理論に特有の記述に不慣れな人は、「言わんとすること」だけを理解できれば十分である。サッカー選手問題というゲームにおいて、(右, 右) という戦略のプロファイル (組み合わせ) から得られるチーム指向効用は、他のどんな戦略

のプロファイルから得られる効用よりも大きい。このとき、プレイヤー A と B の各々は、(右, 右) がチーム指向効用を一意的に最大化することを理由として戦略「右」の選択を結論するならば、彼らはチーム指向推論を行っているという意味である。

従来のゲーム理論との違いは明らかであろう。チーム指向推論において、個人は、 $t(.)$ によって表現されるチーム指向選好（チームの目標）にしたがって戦略の組み合わせを評価し、それを一意的に最大化する組み合わせがあればそれを選択する。こうした発想は標準的な合理的選択理論にはない。

チーム指向推論からチーム推論へ

これまで見てきたチーム指向推論はチーム推論と同じではない。少々分かりにくいかもしれないが、それはチーム推論が行われるための「前段階」あるいは必要条件として理解することができる。それでは二つの推論タイプの違いはどこにあるのか。

チーム指向推論は、他者から独立に、一人の個人で行うことができる。その推論は、チームの他のメンバーの選択に関する信念に条件づけられないからである。（ただし、そこでの「個人」は従来の合理的選択理論が前提してきた個人とは異なり、「私たち」（チーム）の一部としての「私」（個人）であることを繰り返し強調しておく。）これに対し、チーム推論、およびその推論に関連する「チーム選好」、「チーム行為者性」は個人からなる集団の性質であり、共通信念のネットワークを要求する（Sugden 2000: 195）。

チーム推論が成立するためには次の二つの条件を満たす必要がある。

- (1) チームのすべてのメンバーは（ G と $t(.)$ に関して）チーム指向推論を行っている。
- (2) チームのすべてのメンバーは（ G と $t(.)$ に関して）完全なチーム・コンフィデンス（full team confidence）をもつ。

この (2) の「チーム・コンフィデンス」とは、チーム全体への信頼（感）を指し、それはチーム内の各メンバーがチーム指向推論を行っていることへの完全な相互信念から得られるとされる。これら二つの条件を満たすと、「チーム指向選好」は「チーム選好」に移行し、「チーム指向推論」は「チーム推論」に移行する。そしてチームは行為者となる。

簡単な例を使って説明しよう。ハイローゲームを「チーム指向意思決定問題」として捉えると、次の利得表が得られる。

■ チーム指向意思決定問題としてのハイローゲーム

		プレイヤー 2	
		Hi	Lo
プレイヤー 1	Hi	2	0
	Lo	0	1

各プレイヤーは、このゲーム G の構造を知っている。すなわち、プロフィール (Hi, Hi) がチーム指向効用関数 $t(\cdot)$ の値を最大化する ($t(Hi, Hi) = 2$) という事実を知っている。プレイヤー 1 はこの事実にもとづいて「Hi」を選択し、プレイヤー 2 もこの事実にもとづいて「Hi」を選択する。この段階において彼らはチーム指向推論を行っている。というのも、各プレイヤーは相手とは独立にこの推論を行っていると考えられるからだ。

だが、チーム {プレイヤー 1, プレイヤー 2} において、各メンバーがチーム指向推論を行っていることに関する相互信念が成立すれば、チーム指向選好はチーム選好になり、チーム指向推論はチーム推論になる。

さらにこれを述べ直すと、チーム指向推論を行っている各プレイヤーたちは、まず、プレイヤーの集団（チーム）にとって最善の結果をもたらす戦略の組 (Hi, Hi) を探し出す。次いで、もうそうした組が一意的に存在するのであれば、彼らは、その中で自分が担当する戦略を識別し、他のメンバーもチーム指向推論を行っているという相互信念にもとづいて、戦略「Hi」を選択する。これが成立するならば、彼らはたんなるチーム指向推論を超えて、チーム推論を行っ

ていることになる。

5. 実践的推論としてのチーム推論

しばしばサグデンは「合理的選択理論は推論についての理論 (theory of reasoning) である」と述べる。これは考えてみれば当然であるが、ゲーム理論家たちがこのことを強調することはあまりない。一般に、「推論」とは、ある前提から結論を導き出す（心的）プロセスを指す。この節では「推論」という観点からチーム推論の特徴を考察していきたい。

実践的推論

チーム推論は実践的推論 (practical reasoning) の一種である。ここでは「実践的推論」を「行為者の欲求と信念に関する前提から、行為者のなすべきことを結論として導き出す推論」と規定しておこう。以下は現代の論者たちが最も基本的だと考える実践的推論の一般形式である。

* 実践的推論の一般形式

前提1 行為者 S は目的 G を達成したい。

前提2 S は、行為 A を遂行することが G を達成するための
もっともよい手段だと信じている。

結論 S は A を遂行するべきである。

この種の実践的推論は、実際に人々が従っている法則というよりは、むしろ合理的な行為者 (rational agent) であれば従うべき規範だと考えられる。ここで言う「合理性」は「道具的合理性」(instrumental rationality) と呼ばれることもある。なぜなら、行為者 S の合理性は、前提1で表明される目的（欲求）の実現のために、いわば手段（道具）として使用されるだけだからだ。こうした合理性に関しては様々な議論があるが、本稿では「個人合理性」や「個人行為者性」

という問題含みの前提に的を絞って議論を行っている⁽¹¹⁾。

単純なチーム推論の図式

チーム推論をより明示的な推論のかたちで書くとどうなるだろうか。サグデンが提示する推論図式は論文が発表された時期によって若干異なるのだが、以下ではその中の一つを考察しよう。

*** チーム推論の図式 (Gold and Sugden 2014a; 2014b)**

- (1) 私たちは集団 S のメンバーである。
- (2) 私たちのそれぞれは S と自らを同一視している⁽¹²⁾。(Each of us identifies with S.)
- (3) 私たちのそれぞれはチーム効用関数 U の値を最大化することを欲している。
- (4) 戦略のプロファイル A は U を一意的に最大化する。
- (5) 私たちのそれぞれは A の担当部分を選択するべきだ。(Each of us should choose her component of A.)

この推論図式は前提 (1) ～ (4) から結論 (5) を導くものである。なお、(2) ～ (4) は共通知識であると仮定されている。この種のチーム推論と従来の実践的推論との違いは明らかであろう。従来の実践的推論の担い手は（純粋な）個人であるのに対し、チーム推論では「私たちのそれぞれ」ないし「集団 S のメンバーとしての私」が推論の担い手となる。つまり、従来の実践的推論とは、行為者性（agency）のレベルが異なるのである。チーム推論では、私たちは一つの行為者の単位を形成しており、私たちのそれぞれは「私たちの目的」を追求するのである。

サグデンにおける集団行為者性

「集団行為者」（group agent）あるいは「集団行為者性」（group agency）は、近年のペティットらの仕事に代表されるように（List and Pettit 2011）、社会存在論

の主要なトピックスの一つになっている。サグデン自身は明示的に「集団行為者」を定義していないが、それをかなり広い意味で理解していることは次の言葉からも明らかである。

彼ら〔ロヴェインとペティット〕の定義によれば、集合的意図に関する文献に登場する、一緒に一台の自動車を押す見ず知らずの二人といった一時的な（つかの間の ephemeral）集団の例のいくつかは行為者性を示さないだろう。しかしながら、それらの集団はチーム推論を用いるかもしれない（Gold & Sugden 2007a: 123, 強調は引用者）。

サグデンの言う「集合的意図に関する文献」とは具体的には、集合的志向性の理論家たちの文献を指すと思われる（Bratman 1999; Searle 1990; Gilbert 2003）。一方、ペティットの理論において、集団行為者性は、メンバーを変えながらも同一性を保ち、何らかの構造とルールを備えた集団にのみ帰属する（List and Pettit 2011）。したがって、国家や会社や学会は集団行為者であるのに対し、「（何らかの事情で）一緒に自動車を押すことになった見ず知らずの二人」——この種の集団は集合的志向性の理論家たちが好んで分析するものである——は集団行為者を形成しない。そうした即席の二人組はあるミッションを終えれば消滅するような集団であり、通常は構造もルールももたないからである。ところが、サグデンはそうした集団でさえも「チーム推論を用いるかもしれない」と述べているのである。このことは何を意味するのだろうか。

サグデンの意図からは少し離れるかもしれないが、私自身は、チーム推論を用いる人々のどんな集まりも集団行為者であることを意味すると解釈したい。そうした集団は一時的にのみ結成されるものでもよく、明確な構造や意思決定のルール等をもつ必要はない。もちろん高度に組織化された集団においてもチーム推論は行われうるが、サグデンが典型と考えているのは比較的小規模の集団である。集合的志向性の哲学者たちもそうした小規模集団（ピアノを階下に降ろす二人組など）を考察の中心とすることはよく知られており、とくにサグデ

ンが念頭に置く集団行為者は、マーガレット・ギルバートにおける複数的主体 (plural subject) と親和性が高いように見える。その理由は、ギルバートの理論において、A と B が X することを集合的に意図することの必要十分条件は、A と B が X することをひとつの集合体として意図することに共同でコミットすることであり (Gilbert 2003: 46)、さらに「定義上、何らかの仕方で共同でコミットする人びとのどんな集まりも複数的主体を構成する」(Gilbert 2014: 63) と規定されるからである。ギルバートの理論において、集合的意図 (および共同コミットメント) がある集団を複数的主体にするのと同様に、サグデンの言うチーム推論はある集団を集団行為者 (チーム行為者) にするのである。ここで言及した集合的意図とチーム推論の関係については次節で考察することにした。

6. チーム推論と集合的意図の形成

これまで見てきたように、チーム推論は、標準的な合理的選択理論の困難を解決するために提案された概念であるが、私の見方によれば、それは集合的意図 (collective intention) の形成を説明することに貢献する。このことは従来の社会存在論に欠けてきた議論——集合的志向性の生成ないし発生を問う議論——を補うという意味で重要であると私は考える。

社会存在論とチーム推論の理論

社会存在論者たちは、集合的な心的態度が成立するための諸条件 (理想的には必要十分条件) を決定しようとするものの、そうした心的態度がいかに生まれてくるのかについてさほど関心を払わない。私はこうした傾向自体が「悪い」と言っているわけではない。どのような条件が満たされれば、「私たちはともに何かを信じている」(集合的信念) ことになるのか、「私たちはともに何かを欲している」(集合的欲望) ことになるのか、「私たちはともに何かを意図している」(集合的意図) ことになるのか等を考察することは、ある現象の解明 (分析) を目的とする理論にとって本質的である。これは、「合理的な個人」から出

発して、いかにして協力・協調が生まれるのかを説明しようとする合理的選択理論のアプローチとは異なるとはいえ⁽¹³⁾、一つの正当（かつ正統）な哲学的アプローチである。しかしながら、社会存在論が社会的世界に関する十全な理論を目指すのであれば、集合的態度の発生に関する説明の不在は「欠陥」と見なされるかもしれない。もしそうであればそれは何かによって補われる必要がある。私はその役割を担うのがチーム推論の理論だと主張しているのである。

集合的意図の形成

私がいま述べたことは、少なくとも「集合的意図」についてはうまく当てはまるように見える。次のゴールドとサグデンの言葉はそれを示している。

行為者が自らのなすべきことについて熟考するとき、その行為者の推論の結果は意図である。推論と行為のあいだには意図が介在する。したがって、チーム推論から生じる意図を集合的意図として扱うことは自然である（it is natural to treat the intentions that result from team reasoning as collective intentions）（Gold & Sugden 2007a: 111, 強調は引用者による）。

この件の中でゴールドとサグデンは、個人の意図が（個人の）実践的推論から生じるのと同様に、集合的意図はチーム推論から生じると考えるのは「自然」と述べている。彼らの見立てが正しいのであれば、チーム推論の理論は、先ほど指摘した社会存在論の欠陥——「生成」に関する議論の不在——を補うことができるだろう。そして、私は彼らの見立ては正しいと考える⁽¹⁴⁾。

この意図の生成（形成）について、ハイローゲームの例を使って確認しておこう。

■ハイローゲーム（再掲）

		プレイヤー 2	
		Hi	Lo
プレイヤー 1	Hi	2, 2	0, 0
	Lo	0, 0	1, 1

まず個人の実践的推論における意図の形成について確認しておく。このハイローゲームでは、各プレイヤーは相手が「Hi」を「Lo」とちょうど同じ確率で選ぶと信じていると仮定しよう⁽¹⁵⁾。この仮定の下では、「Hi」の選択から得られる個人の期待利得は「Lo」の選択から得られる個人の期待利得よりも大きいという理由から、各プレイヤーは「Hi」を選択する意図を形成する。この実践的推論が形成するプレイヤーの意図は集合的ではない。そこで形成されるのは社会存在論者たちが「私－意図」（I-intention）と呼ぶ個人の意図である。

次に、チーム推論を考える。このゲームにおいて、各プレイヤーは集団「プレイヤー 1、プレイヤー 2」と自らを同一視しており、その集団を行為者の単位として認識している。また、チーム効用関数は（Hi, Hi）というプロファイルによって一意的に最大化されることを知っている。さらに、これらすべては彼らのあいだの共通知識であると仮定される。これらを理由として、各プレイヤーは、この戦略プロファイルにおいて自分が担うべき戦略「Hi」をプレイする意図を形成する。このチーム推論によって形成される意図は集合的である（Gold & Sugden 2007a: 128）。それはまさに社会存在論者たちが「私たち－意図」（we-intention）と呼ぶ——「私－意図」の集まりには還元されない——特別な意図である。

「私たち－意図」はプリミティブな心的現象であること（Searle 1995）、あるいは「私－意図」に還元不可能な現象であることが強調されすぎるあまり、それを「ミステリアスなもの」だと誤解する人がいるが、少なくともその生成に関しては何ら神秘的な要素は含まれない。何らかの集団に属する行為者たちがある仕方推論（チーム推論）を行った結果として生じる心的態度が「私たち－意図」（集合的意図）であるにすぎない。

このようにサグデンの理論は、集合的意図という心的態度あるいは心的状態（mental state）が、チーム推論という動的な心的プロセス（mental process）によって形成されることを示すことにより、集合的意図を「脱神秘化」することによって一役買うとともに、もっぱら集合的態度に関する静態的な解明（概念分析）を行ってきた社会存在論を補完する役割を果たすのである。

7. 個人主義／集合主義の問題——方法論的考察

最後に、チーム推論の理論が、社会科学と社会哲学の方法（メソッド）に対してどのような含意をもつのかを述べてこの論考を終えることにしたい。とくに以下で議論の対象にしたいのは「方法論的個人主義」である。なぜかと言えば、それは社会科学と社会哲学の双方にとって長らく支配的な方法だとされてきたからである。

方法論的個人主義と集合主義

「方法論的個人主義」はいくつかの仕方で表現される。以下では、ラルス・ウデーンによる定式化とエドゥナ・ウルマン＝マルガリートによる定式化を挙げておこう。

〔方法論的個人主義にしたがえば、〕社会的現象（集合的現象）は、個人に関する現象（個人の心的・物理的状态、個人の行為、個人間の相互行為等）のみによって説明されなければならない／説明されうる（Udehn 2001）。

方法論的個人主義とは、社会的集合体〔社会的集団〕に関する言明は、個人と彼らの行為および関係だけに言及する言明に還元できると説く立場をいう（Ullmann-Margalit 1977: 14）。

ウデーンの言う「社会的現象」（集合的現象）は、社会的事実、社会的性質（社

会的役割)、社会的関係、社会種(社会的カテゴリー)、社会的出来事・行為、社会的状態、社会的集団、社会的制度、社会関係資本といった広範な社会的存在者を指すと考えられる。これに対し、ウルマン＝マルガリートによる定式化は「社会的集団」に限定された方法論的個人主義であるという違いはあれ、これら二つの定式化に本質的な違いはない。

一方、「方法論的集合主義」(methodological collectivism)は、方法論的個人主義の否定として定式化できる。

社会的な現象(集合的現象)は個人の現象(個人の心的・物理的状态、個人の行為、個人間の相互行為等)のみによって説明される必要はない(説明されえない)。

社会的集合体〔社会的集団〕に関する言明は、個人と彼らの行為および関係のみに言及する言明に還元できない。

方法論的集合主義は、形式的には「否定的言明」として表現されるが、実質的には、「集合的なもの」を説明項として許容する立場である。この立場を「方法論的全体論」(methodological holism)と呼んでも構わないし、個人主義の否定であるから「方法論的非個人主義」(methodological nonindividualism)と呼んでも構わない。これらのあいだに細かな区別を行う論者もいるが、さしあたり本論考では同じ立場を表す語として用いる。

いま見た標準的な定式化に照らせば、明らかにチーム推論の理論は方法論的個人主義ではなく、「方法論的集合主義」(全体論)あるいは「方法論的非個人主義」に属するように見える。だが、この見方は正しいのか。

個人主義と単数主義

チーム推論の理論は方法論的個人主義を逸脱しているのか。方法論的個人主義を従来よりも広い意味で解することによって、この問いに「ノー」と答えよ

うとする立場もある。有力な社会存在論者の一人として知られるデボラ・トレフセンは——チーム推論には直接言及していないとはいえ——そうした立場に立つと思われる。彼女は「方法論的個人主義」と「単数主義」(singularism)を区別して次のように述べる。

〔・・〕方法論的個人主義は、社会的現象（事実、対象、出来事、状態など）は個人の志向的状态およびそれらのあいだの関係のみによって説明されなければならないというテーゼである。〔しかし〕そこでの個人が完全に自分自身の理由にもとづいて行為する単数的な行為者 (singular agents) として見なされるべきか、あるいは彼らはチームの理由にもとづいて行為すると見なされるべきか、という問いについてはオープンなままである。したがって、単数主義の否定は必ずしも方法論的個人主義の否定ではない (Tollefsen 2018: 391-392, 強調は引用者)。

ここでの「単数主義」はマーガレット・ギルバートに由来する用語である。それは「集合的なもの (collectivity) についての概念は、もっぱら自分自身の目標と選好にもとづいて行為する単数的行為者の概念図式のみによって解明可能である」と説く立場を指す (Gilbert 1989: 12)。ギルバートによれば、合理的選択理論はこうした単数主義あるいは単数的行為者性によって支配されているという。

この区別を導入して、サグデンによるチーム推論の理論は「単数主義は否定するが方法論的個人主義は否定しない」立場であると主張することは不可能ではないだろう。実際、サグデンの次の言葉はこうした見方を後押しするように見える。

私の説明において、チーム行為者性あるいはチーム選好に関するあらゆる命題は、個人に関する何らかの確定した命題に還元可能である (Sugden 2000: 178)。

だが、この言葉に続いて、次のように述べていることに注意を払わなければならない。

しかしながら、還元された個人レベルの命題は必ずしも従来の合理的選択理論において認められてきた命題ではない。チーム行為者性は〔・・〕合理的選択理論において表現されるような個人行為者性（individual agency）に還元することはできない（idem）。

このサグデンの言葉は次のように理解することができるだろう。（一）チーム推論に関するあらゆる命題は、個人に言及する何らかの命題（の集まり）にさしあたり書き直すことができる。だが、（二）そうやって書き直された命題に現れる「個人」は、もはや従来の合理的選択理論が前提してきた個人ではない。つまり自らの選好と信念のみにもとづいて行為する個人ではない。したがって、（三）「翻訳」された命題は従来の合理的選択理論が許容するような命題ではない以上、チーム行為者性の個人行為者性への還元は見せかけのものである。

これより、チーム推論の理論は、単数主義を否定するものではあっても、方法論的個人主義を否定するものではないと結論づけられるだろうか。トレフセンであれば「イエス」と答えるかもしれない。というのも、彼女の理解によれば、方法論的個人主義は、「チームの理由にもとづいて行為する個人」を排除するものではないからである。しかしながら私自身の答えは「そう結論するのはミスリーディングである」というものである。

合理的選択理論の「二枚舌」

チーム推論の理論が方法論的個人主義の立場に立つか否かはたんなる言葉の約束の問題であり、それ以上でもそれ以下でもないという意見もあるだろう。こうした意見は一見するともっともらしい。当該理論が方法論的個人主義にもとづくか否かは「方法論的個人主義」という言葉をどう定義するか、どう解釈するかに依存するというわけである。しかしながら、ある理論を理解する際に

何らかの「ラベル」を用いるのであれば——良くも悪くもほとんどの哲学的議論においてラベルは使用される——できるだけ私たちをミスリードすることのないラベルを使うべきである⁽¹⁶⁾。この意味でトレフセンによる「方法論的個人主義」の拡大解釈は、「個人主義」の内実をあやふやにしまい、無用の混乱を引き起こす恐れがある。したがって、私は、個人主義における個人を強引に拡張することで、方法論的個人主義を守ろうとするよりは、「チーム推論の理論は方法論的集合主義の立場に立つ」と端的に結論の方が望ましいと考える。

「集合主義」(全体論)についてのよくある誤解ないし偏見については、すでに別の場所で論じているので⁽¹⁷⁾、以下では、チーム推論が「個人主義 vs. 集合主義」問題に対してもちうる含意を取り出して本稿を終えたい。

私の見方では、チーム推論の理論は、標準的ゲーム理論の「二枚舌」、すなわち一方で方法論的個人主義を標榜しながらも、他方で個人ならざる集団(国家や企業など)をプレイヤーとして認めるという「整合性の欠如」に注意を促す。チーム推論は多くの社会学者・哲学者たちが「うすうす気づいている事態」をあらためて浮かび上がらせるのである。それはハロルド・キンケイドの次の言葉に要約されるような事態である。

個人主義者たちは、マクロ社会学的な存在者への言及を排した社会科学の
みが適切であると主張する。しかしながら、ほとんどの社会科学はこの要
求を無視している (Kincaid 1996: 142)。

なるほどチーム推論の理論は、社会的集団それ自体がプレイヤーになるゲームを明示的に分析する理論ではないし、いわんやキンケイドが念頭におくようなマクロな社会構造に関する理論でもない。だがそうした違いにもかかわらず、その理論は他の諸理論と同様に、方法論的個人主義者たちの欺瞞を際立たせる。彼らの「欺瞞」とは、「個人のみ」と言いながら、「個人ならざるもの」を——ときに秘密裏にときに堂々と——理論的説明に持ち込む態度を指す。(社会存在論者の一部もこの欺瞞に対して敏感である。) チーム推論の理論家たちは、「個

人」をプレイヤーとする、見かけのうえでは通常のゲームと変わらないゲームにおいてすら、方法論的個人主義を維持できないケースがあることを教えてくれるのである。（そこでの「個人」はある集団のメンバーとしての個人であり、かつそのことを自覚した個人である。）このことの意義は強調されなければならない。

社会存在論は——それが社会的世界についての統合的な基礎理論を目指すのであれば——集合的意図の形成に関するチーム推論の理論の洞察を取り入れるとともに、その理論の方法論的・存在論的含意にも関心を向ける必要があろう。私は——近年のトレンドに抗して——ある理論の方法論的立場と存在論的立場が乖離することは望ましくない⁽¹⁸⁾と考える。私のこの見解が正しいとすれば、チーム推論の理論がコミットする存在論は、「集合的なもの」を「個人」に還元する、あるいは前者を後者に従属させるような体系ではなく、逆に、「個人」を「集合的なもの」に従属させるような体系でもなく、「集団」と「個人」を相互に還元されえない——しかし互いに依存しあうような——基本カテゴリーとする体系になるはずである。

注

- (1) 本稿は、東京大学社会科学研究所の「社会科学のメソドロジー」2022年度第4回研究会における招待講演「社会存在論とチーム推論の理論」（2023年2月7日）を下敷きにしている。
- (2) Sugden 1993; Bacharach 2006. サグデンとバカラックはそれぞれ独立にこの理論を考案したと言われる。本稿ではサグデンの理論のみを検討する。なお、以下では「合理的選択理論」（rational choice theory）と「ゲーム理論」を同じ意味で用いる。正確には後者は前者の一部である。
- (3) 「シカ狩りゲーム」という名称は、ルソーの『人間不平等起源論』の中の次の件に由来する。

〔・・・〕このようにして、人間たちは、まったく気づかないうちに、相互の約束と、約束を守ることと得られる利益について、なにがしかの粗野な観念を獲得したのだった。というのも、予見能力はこの人たちにとってはなにものでもなく、遠い未来にかかわることどころか、翌日のことさえ考えられなかったからである。シカを捕まえようとしていて、各人がそのために持ち場をしっかりと守らなければなら

らなかったとしよう。そこにノウサギが誰かの手に届きそうなところを通りすぎることでもあれば、その者がためらいもなくノウサギを追いかけることに疑いの余地はあるまい。自分の獲物を捕まえさえすれば、仲間たちと捕まえようとしていた獲物を逃すことなど、まったくといっていいほど気にかけなかっただろう（ルソー 2016: 99-100）。

- (4) 「利得支配的」(payoff dominant) であることの定義は次の通り。(ナッシュ) 均衡 E_1 が他の(ナッシュ) 均衡 E_2 を(強く) 利得支配するのは、すべてのプレイヤーについて、 E_1 から得られる利得は、 E_2 から得られる利得よりも高いときかつそのときにかぎる (cf., 渡辺 2021)。

- (5) アマルティア・センは、シカ狩りゲームの形式をもつゲームを「保証ゲーム」(assurance game) と呼んだ。石原・金井 (2002) はセンが突き当たった困難について、次のように述べている。

センによれば、保証ゲームにおいては、パレート最適な状態が実現するか、パレート劣位な状態が実現するかは、それぞれの個人の、相手の行為についての予期に依存している。この「保証問題」[「相手が自分と同じことをするという保証はいかにして得られるのか」] から抜け出るために必要なのは、他の人が「正しい」ことをすると確信している (assured) ことである。それならば、自分も「正しい」ことをすることが自分の利益となるのである。センはパレート性による説明は保証ゲームにおいて十分ではないことを示唆しているのだが、それに代わる具体的な合理性基準は示していない (石原・金井 2002: 70)。

- (6) トーマス・シェリングは、この構造をもつゲームを「純粋共通利益ゲーム」(pure common-interest game) と呼んだ (シェリング 2008: 補遺 C)。ちなみに「ハイローゲーム」という名称は「チーム推論」の生みの親の一人であるバカラックに由来する (Bacharach 2006)。
- (7) 「リスク支配による均衡選択」を十全に理解するためには少々面倒な計算を行う必要がある。関心がある人は渡辺 (2021: 56-58) による分かりやすい解説を参照してほしい。
- (8) 合理的選択理論において「B より A を好む (選好する)」(prefer A to B) が形式的に規定された厳密な概念であることはたしかである。しかし、それは哲学で議論されてきた「欲求」(desire)、すなわち「欲する」という心的態度を精緻化したものにすぎない。合理的選択理論では「欲求と信念にもとづいて行為する」と言う代わりに「選好と信念にもとづいて行為する」と表現する。
- (9) たとえば幼い息子が何らかの食物アレルギーをもっているとしよう。私も妻も、個人のレベルで言えば、食事付きのホテルの方を好むのだが、皆が安心して過ごすために「私たちはキッチン付きの宿泊施設の方を好む」ことはありうる。ひとつ注意しておきたいのは、「私たちの選好」(チーム選好) は、何らかの意見集約ルール (たとえば多数決) によって各自の選好から導出されるようなものではないということである。実際、サグデンが「集合的意思決定」(collective decision) あるいは「集合的選好」(collective

- preference) の理論であるとされる社会的選択理論 (social choice theory) に言及することはほとんどない。その理由は——標準的な合理的選択理論の一つとして——社会的選択理論が個人の選好および信念のみを前提するからだろう。
- (10) サグデン自身は混合戦略で考えているが、むしろその場合ナッシュ均衡は3つある。三つ目の解は「A と B がともに確率10/21で「右」を選び、確率11/21で「左」を選ぶ」というものである。ここでは問題をより単純にするために混合戦略は考慮しないことにする。いずれにしても問題の本質は変わらない。
- (11) 「様々な問題」の一つに、たとえば「行為者 S は、お気に入りのホストにそのクラブのナンバーワンになって欲しい」という目的ないし欲求をもつことが「合理的」と言えるのかという問題がある。(そのために全財産を処分する、借金をする、売春をするといったことが最善の手段だと信じていれば、そうすることが合理的である!) 通常の合理的選択理論は、どのような目的 (欲求) をもつことが合理的／非合理的であるのかを議論する枠組みをもたない。これは理論が「リベラルな個人主義」の価値観と強く結びついているからだろう。
- (12) 「自らを集団 G と同一視する (集団 G と同化・一体化する)」という言い回しに驚く人がいるかもしれないが、これは、G のメンバーである i が「G を、ある単一の目的を追求して行為する、行為者性の単位として捉えるときに、 i は自らを G と同一視する」(*i identifies with G if i conceives of G as a unit of agency, acting as a single entity in pursuit of some single objective*) ことを表現するにすぎない (Gold & Sugden 2007a: 125)。こうした「同一視 (同化・一体化)」はありふれた現象である。たとえば、あなたの所属する集団が賞賛されればあなたは嬉しくあるいは誇らしく思い、非難されればあなたは悲しむあるいは憤るといったことは、あなたが自らと集団を「同一視」しているからである。
- (13) 誤解を避けるために付け加えておくが、これは「発生」(生成) に関する合理的選択理論のアプローチが経験的なものであることを必ずしも意味しない。実際、サグデンのアプローチは実験や調査にもとづく経験科学的なものではなく、あくまでも概念的・規範的なものである。
- (14) なるほど「意図」は様々な仕方で形成されるだろう。しかし、たとえば「私はホテルに宿泊するつもりだ」という私の意図を、私の実践的推論——私は快適に寝ることができる場所で夜を明かしたい。その目的を達成するためにもっともよいのはホテルに宿泊することである、等々——の結果として理解することは決して奇妙なことではない。同様の仕方、で、「私たちはキッチン付きの施設に宿泊するつもりだ」という集合的意図を、私たちのチーム推論の結果として理解することは——サグデンとゴールドが述べるように——自然である。
- (15) 第2節で検討したハイローゲームではこの仮定を加えていない。
- (16) ある理論や立場について論じる際に「ラベル」、とりわけ「○○主義」「××説」といったラベルを持ち込むことを端から拒絶する人たちがいる。その理由は、ラベルが当の理論や立場の特殊性を捨象することになり、議論が極度に単純化されてしまうからと

いったものだろう。もしそうであれば彼らは正しい。ただ、そうした人たちはラベルを用いることの「効用」——理論や立場のポイントを整理し、他の理論や立場との違いを明確化する、あるいは典型的なラベルの特徴との違いを取り出すことで「特異性」をより際立たせるなど——を忘れてしまっている。私の見解では、ラベルを拒否する人は——逆説的ではあるが——ラベルを適切に使って堅実な議論を行う人よりも「ドグマティック」であることが多い。

- (17) 倉田 剛「集合的志向性の理論——その概要と課題」、『哲学年報』第84輯、九州大学大学院人文科学研究院、2025年。
- (18) 「方法論集合主義は存在論的集合主義を含意しない」、「存在論的個人主義は方法論的個人主義を含意しない」、「方法論的集合主義は存在論的集合主義を含意しない」等々、「説明」と「存在」との分離を説くのが現在のトレンドである (Udehn 2001; Zahle and Collin 2014)。なぜ私がこのトレンドに反対するのかについては、紙幅の都合上、ここで十分な議論を行うことはできない。だが、私の（説明に関する）實在論的立場について一言だけ述べておくとすれば、何であれ、世界およびわれわれ人間に関する説明は、それらの本性と構造に即した説明でなければならない。そうであれば、説明が存在から乖離することは望ましくない。

参考文献

- Bacharach, M. (2006). *Beyond Individual Choice: Teams and Frames in Game Theory*, Edited by N. Gold and R. Sugden, Princeton University Press.
- Bratman, M. (1999). *Faces of Intention: Selected Essays on Intention and Agency*, Cambridge University Press.
- Cartwright, N. and E. Montuschi, (eds.), (2014). *Philosophy of Social Science*, Oxford University Press.
- Coleman, A. M. and N. Gold (2018). “Team reasoning: Solving the puzzle of coordination,” *Psychonomic Bulletin & Review* volume 25: 1770–1783.
- Gilbert, M. (1989). *On Social Facts*, Princeton University Press.
- Gilbert, M. (2003). “The Structure of the Social Atom,” in Schmitt, F. F. (ed.), *Socializing Metaphysics: The Nature of Social Reality*, Rowman & Littlefield Publishers, Inc.: 39–64.
- Gilbert, M. (2014). *Joint Commitment: How We make the Social World*, Oxford University Press.
- Gold, N. and R. Sugden (2007a). “Collective Intentions and Team Agency,” *The Journal of Philosophy*, Mar., Vol. 104, No. 3: 109–137.
- Gold, N. and R. Sugden (2007b). “Theories of Team Agency,” in F. Peter and H. B. Schmid (eds.), *Rationality and Commitment*, Oxford University Press: 280–335.
- Epstein, B. (2018). “Social Ontology.” *Stanford Encyclopedia of Philosophy*. First published Wed Mar 21, 2018. <https://plato.stanford.edu/entries/social-ontology/>.
- 石原英樹・金井雅之 (2002). 『進化的意思決定』朝倉書店。

- Kincaid, H. (1996). *Philosophical Foundations of the Social Sciences: Analyzing Controversies in Social Research*, Cambridge University Press.
- List, C. and P. Pettit (2011). *Group Agency: The Possibility, Design, and Status of Corporate Agents*, Oxford University Press.
- Nalli, F. (2021). “Robert Sugden’s theory of team reasoning: a critical reconstruction,” *International Review of Economics* 68: 21-40.
- ジャン＝ジャック・ルソー (2016). 『人間不平等起源論』板倉裕治訳、講談社学術文庫。
- トーマス・シェリング (2008). 『紛争の戦略——ゲーム理論のエッセンス』河野勝 [監訳] 勁草書房。
- Searle, J. (1990). “Collective Intentions and Actions”, in P. Cohen, J. Morgan, and M. E. Pollack (eds.), *Intentions in Communication*, Branford Books, MIT Press: 401-415.
- Searle, J. (1995). *The Construction of Social Reality*, Free Press.
- Sugden, R. (1993). “Thinking as a Team: Towards an Explanation of Nonselfish Behavior,” *Social Philosophy & Policy*, vol. 10, no. 1: 69–89.
- Sugden, R. (2000). “Team Preferences,” *Economics and Philosophy*, 16: 175–204.
- Sugden, R. (2005). “The Logic of Team Reasoning,” in Natalie Gold (ed.) *Teamwork: Multidisciplinary Perspectives*, Palgrave Macmillan, Ch. 8: 181–199.
- Tollefsen, D. P. (2018). “Collective Intentionality and Methodology in the Social Sciences,” in Marija Jankovic and Kirk Ludwig (eds.), *The Routledge Handbook of Collective Intentionality*, Routledge, 2018: 389–401.
- Tuomela, R. (2013). *Social Ontology: Collective Intentionality and Group Agents*, Oxford University Press.
- Udehn, L. (2001). *Methodological Individualism: Background, History and Meaning*, Routledge.
- Ullmann-Margalit, E. (1977). *The Emergence of Norms*, Oxford University Press.
- 渡辺隆裕 (2021). 『一歩ずつ学ぶゲーム理論：数理で導く戦略的意思決定』裳華房。
- Zahle, J. and F. Collin (eds.) (2014). *Rethinking the Individualism-Holism Debate: Essays in the Philosophy of Social Science*, Springer.